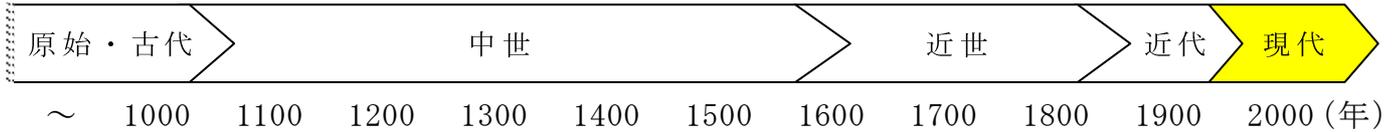


## 6 戦後復興とひろしま ～産業～



### 1 広島県ではどんな産業が盛んなのでしょうか？

広島県は戦争によって、主要な都市を中心に焼け野原となってしまいました。しかし、現在、広島県には、かき養殖、鯛やたこ漁、レモンやみかんなどのかんきつ類の生産、米づくり、自動車製造、造船、化学、筆や琴などの伝統工業、木材、小売・卸売など地域の特色を生かした様々な産業があり、全国的に見ても出荷額の高い産業が多くあります。また、日本国内や世界で活躍する企業も数多くあります。



広島で製造された自動車  
(マツダ(株)提供)

戦後、広島県の産業はどのように復興していったのでしょうか。どんな産業がどのようにして生まれ、現在にいたっているのでしょうか。広島県の「ものづくり」(製造業)を中心に考えてみましょう。



戦争で大きな被害を受けた広島は、戦後、どのように復興していったのでしょうか？

### 2 どのような計画のもとに復興は進められたのでしょうか？

1951(昭和26)年、当時の広島県知事だった大原博夫は、「広島生産県構想」を進めました。この構想は、当時全国平均の8割弱だった県民所得を1956(昭和31)年までに全国水準まで引き上げることを目標にしていました。このように所得水準が低かった理由には、戦前の広島県の産業構造が軍需産業に依存していたことが背景にあったと言われていいます。

広島生産県構想は、農林水産業の振興、商工業の振興、交通網の整備強化、治山治水の確立の四つを産業振興の重点に掲げていました。その後の第二次生産県構想では、臨海工業地帯の造成に重点が置かれ、宇品地区の臨海工業地帯を増築することが決定しました。

また、1955(昭和30)年頃からは、大竹市、呉市を中心とする旧軍施設への企業誘致が積極的に行われました。広島市から呉市にかけては鉄鋼・造船・自動車等の重工業が急速に発展し、大竹市には石油コンビナー



『生産県へのみち』  
(広島県立文書館提供)

トができました。こうして、広島生産県構想は着実に実を結び、工業化が進むこととなりました。

1958（昭和 33）年には、軍需産業からの転換や生産県構想により、県民所得は1950（昭和 25）年の約 3 倍となりました。



現在の大竹市コンビナート（大竹市提供）

### 3 広島県内の企業は復興に向けどのように動いたのでしょうか？

戦争が終わり、県内には戦時中の軍需施設と多くの失業者があふれることとなりました。その後、次第に工場などでは機械の修繕や整備作業がはじめられ、また、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の許可を受け、軍需施設の平和産業への転換も図られました。例えば、呉市広地区の海軍航空廠<sup>(1)</sup>では、広島鉄道局が機関車部品の製作や自動車修理を行いました。

広島の自動車製造の代表メーカーである「マツダ」は、最初は、コルク生産を主に行う「東洋コルク工業」という会社でした。社名を「東洋工業」に改めた後、1931(昭和 6)年には、3 輪トラックの生産を開始しましたが、戦争中は歩兵銃<sup>じゅう</sup>や航空機用発動機部品などを生産する、陸海軍の共同管理工場となっていました。

軍需を中心としていた東洋工業でしたが、敗戦から 2 か月後には民需生産転換計画、つまり平和産業への転換計画を立て、GHQ の許可を得て 12 月には自動三輪車、自転車、削岩機<sup>さくがん</sup>、工具類などの生産を開始したのです。

その後、日本のモータリゼーション<sup>(2)</sup>が加速する中で、次々と新車種を発表し、現在では、世界的な自動車生産メーカーとして活躍しています。

このようにして、広島県では、戦争中に軍需産業に使用されていた施設やそ

年	マツダの歴史
1920 (大正 9)	東洋コルク工業として設立
1927 (昭和 2)	東洋工業に社名を変更
1931 (昭和 6)	3 輪トラックの製作開始 「軍需工業動員法」により陸海軍の共同管理工場となる
1945 (昭和 20)	終戦をむかえ 3 輪トラックの輸出を再開
1957 (昭和 32)	自動車生産累計 20 万台を突破
1960 (昭和 35)	R 360 クーペ生産・販売開始
1963 (昭和 38)	自動車生産累計 100 万台を突破
1967 (昭和 42)	初のロータリーエンジン搭載車である「コスモスポーツ」を発売



3 輪トラック「マツダ号」



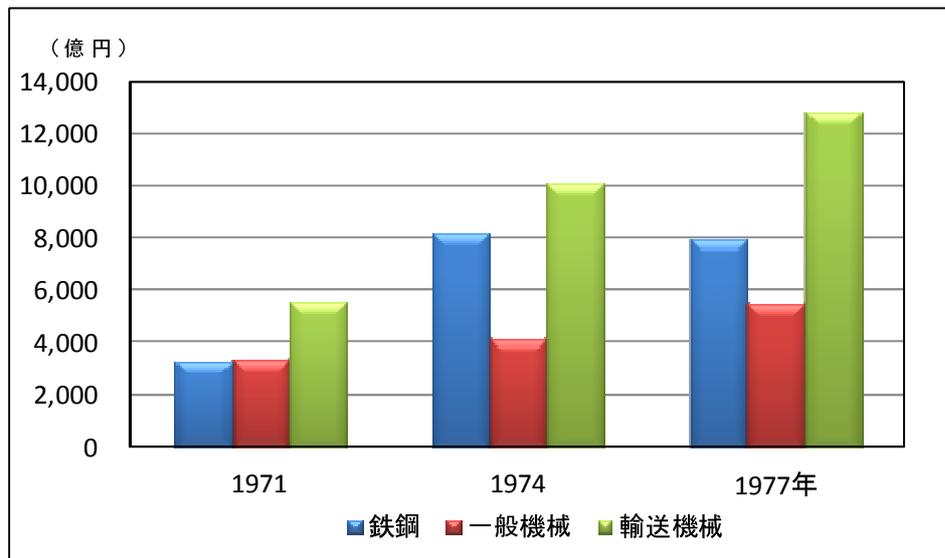
R360 クーペ



コスモスポーツ（初代）

（※写真はマツダ(株)提供）

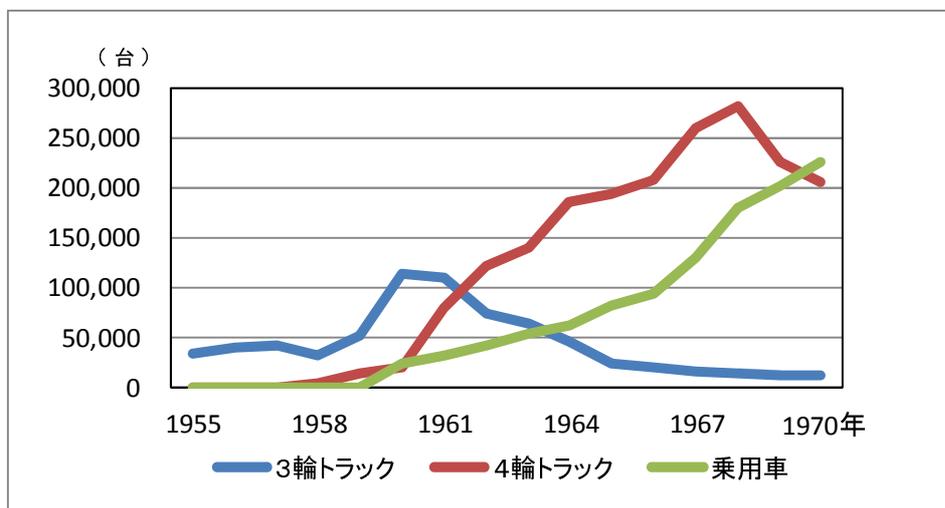
の技術を活かし、製造業を中心に発展しました。中でも製造業の中心となったのは、自動車と造船です。グラフは、高度成長期の主要工業の生産額の推移を示しています。輸送機械（自動車や造船など）の割合が高くなっているのがわかります。



主要工業の推移 (『広島県史』)

#### 4 重工業の発展によって広島はどのように変わったのでしょうか？

東洋工業は総合自動車工業の確立をめざし、1955（昭和30）年代後半には設備の拡張を積極的に進めました。グラフからもわかるように、自動車（乗用車）の生産台数は年々増加傾向にありました。東洋工業では、大量生産の体制を築くため、新工場用地が必要となっていました。



東洋工業自動車生産台数 (『広島県史』)

広島県は、第二次生産県構想の一環として広島市宇品地区東部公有水面を埋め立てる臨海工業地帯の造成を進めていました。東洋工業は広島港東部埋め立ての工場用地をゆずりうけ、ここに自動車工場の増築を計画し、工場は1967（昭和42）年4月に総工費106億円をかけて完成しました。

この工場の生産台数は、初めはひと月の生産能力を5000台としていましたが、翌年には1万2000台に増強するほどで、安芸郡府中町から広島市宇品地区にまたがる自動車一貫量産工場地帯が誕生したのです。

こうした産業の発展などの影響で、広島県の生産所得は、1950（昭和25）年で662億円でした



宇品乗用車専門工場（昭和55年撮影）  
（マツダ（株）提供）

が、1962（昭和37）年には3,566億円と5.4倍に、県民一人当たりの所得も3万1000円から約19万円と6.1倍に上昇し、全国平均を上回りました。広島県の復興には自動車産業や造船産業等の製造業の発展が大きく貢献しています。



広島産業が、戦後、どのように復興していったのか、調べたことや考えたことをもとに自分の言葉でまとめてみましょう！

【注】

- (1) 航空機開発を担った軍需工場のこと。
- (2) 自動車輸送機関としてだけでなく、生活必需品として市民生活の中に入り込んできている状態。

【もっと調べてみよう！郷土の歴史】

- 広島県の産業別人口構成の変化を調べてみよう！
- 広島県の農業の特色について調べてみよう！
  - ・ 広島県の農業や水産業で生産高が全国1位のものは何でしょうか。
  - ・ それらはいっ頃からどのようにして盛んになったのでしょうか。
- 広島県の地場産業の戦争中の様子、戦後の復興・発展について調べてみよう！
  - ・ 府中市の家具づくり ・ 福山市松永の下駄づくり ・ 東広島市の酒づくり

◇ マツダミュージアム

住所：安芸郡府中町新地3-1 TEL：082-252-5050 HP

◇ JFEスチール西日本製鉄所（福山地区）

住所：福山市鋼管町1番地 TEL：084-945-3118 HP

◇ 広島県立文書館

住所：広島市中区千田町3-7-47 TEL：082-245-8444 HP

【もっと知りたい！郷土の歴史】

福山の鉄鋼業

1955（昭和30）年から1973（昭和48）年にかけて日本経済は驚異的な経済成長を遂げることとなります。この時期、四大工業地帯以外への工場配置が目指される中で、格好の条件をもっていたのが瀬戸内海地域の臨海部でした。1962（昭和37）年には福山市へ日本鋼管（現JFEスチール）が誘致されることになりました。

また、日本製鉄所（福山地区）では、1966（昭和41）年の第1製鋼工場稼働以降、第3製鋼工場が稼働する1973（昭和48）年までのわずか7年間で世界最大規模の製鉄所を完成させ、1975年度の生産ピーク時には福山としての最高粗鋼生産量（年間1,343万トン）を記録しました。このように日本鋼管から始まった福山臨海部の発達は、世界的にみても競争力のあるものとなりました。



雨天荷役ドーム（福山地区）  
（JFEスチール（株）提供）



日本鋼管福山製鉄所建設協定書の調印の様子  
（1967年度）（広島県立文書館提供）